

小林道夫著

『デカルトの自然哲学』（岩波書店，1996年）

本書は、1991年に著者、小林道夫氏がコレージュ・ドゥ・フランスで行った8回にわたる連続講義「デカルトの自然哲学の限界と射程」に基づいている。この連続講義は、すでに1993年にパリのヴラン社（Vrin）から *La philosophie naturelle de Descartes* として刊行されており、本書はその日本語版にあたる。もとの連続講義がフランスのデカルト研究の専門家を聴衆とするものだったから、本書も、比較的小冊ながら、デカルトの著作と書簡の立ち入った解釈と西洋近世の力学の形成史とをともに視野におさめる充実した内容のものとなっている。

本書の読後感を一口で言うなら、ひとりの哲学者にやどった形而上学的な想像力

が、人々の世界認識を根底から変えてしまうきっかけになることがあるらしい、ということである。デカルトが抱いた「永遠真理創造説」という特異な形而上学的構想は、われわれの自然認識の方向を決める力をそなえていたようである。

永遠真理創造説とは、端的には、数学的真理もまた神によって創造されたのだ、という説である。この説は、永遠の真理である数学的真理は神の知性内容であって、創造に先立つ範型である、と見る旧来の立場からの決別を意味するものであった (pp. 31-33)。と、こう言われてみても、評者も含めて日本の普通の読者には、キリスト教神学の片隅にそんな説があったところで特に深い含意があるとも思われぬ。われわれには、神が世界を創造した、というユダヤ-キリスト教的な教説がまるで切実ではないからである。

しかし創造の教説を切実に受けとるならば、数学的真理も被造物であるということは、それが神の自由意志によって設定されたということの意味し、ここから、数学的真理は、人間精神に生得観念として刻印され、同時に、物質的自然のうちに自然法則として設定された、と見ることも可能になる (pp. 31-33)。すると、人間が数学の生得観念を通じて捉える幾何学的延長は、神によって外なる自然として創造されていると見るのが許されるわけである。この場合、物質的自然は無際限の幾何学的延長となる (pp. 37-38)。近代的な宇宙観の幕開けである。その宇宙は、当然、人間知性と物質的自然の共通の構造である数学を通じて探求されねばならない、というわけで、人間が数学的理論を通じて自然の実在的本質を知ることが可能だ、という近代科学の根本的な洞察そのものが、元をたどれば永遠真理創造説にもとづくことになる (p. 52, p. 79)。言ってみれば、ここに現代の科学的实在論の原型があるのである。

永遠真理創造説に動機づけられたものとしてデカルト哲学を解釈する作業は、本書の前半3章の主題である。後半3章では、この解釈を踏まえて、科学史の知見を加え、デカルト自然学と古典力学との関係が多面的に検討される。その検討は、ホイヘンス、ニュートン、オイラー等との比較に及んでいる。そのごく一端を紹介しよう。

デカルトは、慣性概念をはっきり提示し、直線運動を基本と見なしたという点で、ニュートンに影響を与え、古典力学の形成に重要な役割を果たした (pp. 97-100, pp. 117-121)。しかし、デカルトの自然学は、幾つかの点でニュートン力学とは違う方向をとっている。その典型は重力概念である。デカルトは、重力を天の微細物質の圧力と考えたため、動力学的分析の際、個々の運動物体の周囲にある微細物質の状態を考慮に入れざるをえなくなる。このためその取り扱いには常に経験的事実に関わることに

なり、重力の普遍的法則を数学的推論によって獲得することは不可能と見なされた (pp. 147-151).

デカルトのこの「限界」も、実は、幾何学的延長がそのまま物質的自然 (宇宙空間) であるとする永遠真理創造説に由来している。延長即物質であるなら、宇宙空間 (延長) は微細物質に満たされているはずで、運動の局所的解明も物質の全体系と無関係ではなくなる。ところがニュートン力学では、物質と空間 (延長) は区別され、物体の運動は他の物質を度外視して絶対空間との関係において扱われ得たのである (pp. 176-177)。デカルト自然学は、「宇宙論的物理学のホーリズム」なのであって (p. 150, p. 156, p. 164)、著者の示唆によれば、ある意味で相対論以後の現代の物理学の方にむしろ通じるものがある (pp. 191-196)。

著者のデカルト解釈は、コギトと神の存在証明の綿密な解釈を含み (第3章)、哲学史の伝統に十分則している。が、主観性からの出発という哲学史の通念からは一線を画す。むしろ、著者は、神の存在証明を足がかりにして事物の实在性を主観から切り離してゆく手際にこそ、デカルトの卓越性を見ている (p. 77)。

評者は、このように17世紀の哲学をそれ以後の主観性の哲学から分離し、神学的想像力に貫かれたものと見る姿勢に賛成である。神の存在をなまなましく感じとるのが17世紀ヨーロッパの心性であり、そこでは、一見現実離れた神学論争に、世界の見方を根底から変える荒々しい力が宿っていた。永遠真理創造説もその例に洩れない。本書は、哲学的認識論の通念的枠組みを離れ、神の形而上学と科学史の諸事実とを正面に置く本格的な思想史の試みである。自然科学と形而上学とキリスト教神学とのつながりを考え直そうとするすべての人に本書を薦めたい。

(田村 均)